

夢洲をどうするか

夢洲の都市計画変更を考える市民懇談会（略称、夢洲懇談会）に途中から参加して、大阪市や万博協会との協議、意見書の提出などをしてきた。メンバーから学ぶことが多く、私の貴重な「居場所」になっている。夢洲の都市計画変更は、IR カジノ誘致が現実味を帯びてくるなか、大阪の将来を左右



する問題であることが明らかになりつつある。足もとの地域から、他団体とともに粘り強く活動してきた夢洲懇談会の「成果」だと考えている。それを象徴するのが、日本を代表する環境3団体による3月22日に提出された「夢洲に対する要望書」である。

要望書は環境アセス準備書の市長意見をもとに、夢洲の生物多様性の保全と回復を目指した整備に向けて、4点を強く要望している。愛知万博のときも、地元の活動が国内の環境3団体、WWFなど国際的環境団体を動かし、それがBIE、日本政府に会場変更を迫ることになった。環境3団体の要望書は、そんな愛知万博の動きを「再現」させるようである。愛知万博は「海上の森」という里山だったが、大阪・関西万博の「夢洲」は湿地の生態系保全がキーワードになるのではないか。

要望書でとりわけ注目したのは、最後に書かれている「大阪湾沿岸域に残された湿地の生態系ネットワークの重要な拠点として夢洲を位置づけ、ラムサール条約湿地の登録を目指した保全と回復の取り組みが重要であり、このプロセスは世界に積極的に発信すべく大阪・関西万博のレガシーになりえます」という指摘だ。万博がSDGs達成の貢献を目指すのなら、万博会場の建設整備だけでなく、万博の跡地利用や夢洲の土地利用も生物多様性の保全と回復が欠かせない。

夢洲では万博のあと最短で4年後、大阪府・市はIRカジノの開業を目指している。万博のあとに、IRカジノや観光拠点なんて、夢洲の生態系保全から、もってのほかだ。環境面だけでなく、財政面からも明らかである。夢洲は商業地、高層建築物などを想定して埋め立てられてきたのではない。当然ながら土壌汚染や液状化、地盤沈下が起こる。夢洲特有の土地問題を解決するためには、莫大な資金が必要だ。カジノ事業者はそれを承知で、大阪府・市に圧力をかけて公金投入を条件に、事業者として参入してきたのだ。情報公開請求してきた資料などからも、その一端が明らかになってきた。大阪市のIR用地への公金投入は、住民監査請求などでも争点になるであろう。

夢洲については、大阪港の物流機能の中核、コンテナターミナルとして、今後も活用していくことが求められる。「夢洲まちづくり」構想・計画でも、物流機能と観光機能が両立のはずだった。それがIR誘致の議論の過程で、夢洲を「エンタメ拠点」にしてしまうような暴論が、松井市長などから出てきた。こんな酷いことを黙ってはおれない。

(2022年4月15日)